
マテリアル・ハーツ

稲垣圭吾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マテリアル・ハーツ

【Nコード】

N0106K

【作者名】

稲垣圭吾

【あらすじ】

人の生活にロボットが関わるようになった時代。そんな時勢にあつて、小さな探偵事務所に勤める副島孝介は、ロボットを嫌悪し生きていた。ところがある日、孝介は不気味な露天商から不良品のロボットを買い取ってしまう。それを合図としたかのように、孝介を取り巻く世界は大きく動き出して――！？

誓約

誓約

ロボットは、衆民を助け。
衆民と共にあり。

衆民の隣人たるロボットもまた衆民である。

いついかなる時も、右のことを不変の意識とし、誓
うものである。

当機に息吹を与うる者。以上のことを、ゆめゆめお忘れなきよう。

開発部主任 オル

テガ「ラクスネス

(『Works965』OL起動

マニュアル』序文より)

広く、天井も高い閉鎖空間。闇に囚われたその場所に、ただ二人
だけの気配があった。

「試験体No.251が帰還しました」

若い男の報告に続いて、深淵から湧き出たような低い声が響いた。

「首尾は？」

「殺傷行動は問題なく遂行されました。しかし――」

「……何かあったのか？」

報告者の声に緊張が籠る。

「予めプログラムしていた、掃除が行われませんでした」

「何だと！」

重低音を響かせる男は、座っていた椅子を蹴倒す勢いで立ち上がった。

「それでゴミはどうなった！？」

「別の者が回収しようとしたところで、物音に気付いた近隣住民に発見されてしまいました。警察に通報された模様です」

「なぜその目撃者も消さなかった！」

「対象以外に危害を加えてしまつては『上』から文句が付きます。

それに、既に警察には伝わっていましたから、対応していたとしても最早手遅れだったかと」

もっともな言葉に、男は苛立たしげに爪を噛む。

「使えん連中だ。何を今さら体面を取り繕っている。我々に協力を申し出た時点で、奴らも同罪だろうに」

それは誰に向けた言葉だったか。

量りかねていた報告者の前で、いや、と男は頭を振った。その口元は打って変わって、可笑しそうに釣り上がっている。

報告者が震え上がるほど、凶悪な笑み。

「社会的立場の分、奴らの方が罪は重い。何より、これから起こる全ての罪を、奴らは被ってくれるというしな。踊れ踊れ存分に！そして、最後に潰れるのはステップをリードした者だと思ひ知れ！ク、くはハはは！」

粘り気を持ったように嫌悪を催す笑声が、辺りを包む闇を澱んだものに変えていった。

第一章

空が白い。

その色彩は雲のそれではなく、青の彩度を極めて高くした結果としての白だ。

人々が空を見上げ『青空』と表現しなくなったのはいつからだろうか。ふと、そんなことを考える。

ともあれ本日は天気晴朗。

春の歩道には様々な年代の人が溢れ、紫外線遮断用の極薄フィルムでコーティングされたガラス窓を挟んでいても、外の喧騒が聞こえてきそうだ。

風が街路樹の新芽を揺らす。

パステルカラーで埋め尽くされた、海外ブランドの支店やトレンドショップが雑多に立ち並ぶメインストリートの一画。そこにある中高層ビルは外装こそモダンなガラス建築だが、内部の雰囲気は外の華やかさとは縁遠い。

静寂に包まれた五階にて、窓枠に肘を突いて眼下を眺めていた男が不意に息を吐いた。

重たい呼吸が解けていく二百平米ほどのフロアの窓。そこには大きく『桜井探偵事務所』という文字があった。

「おいおいなんだ孝介、構って欲しいような溜息ついて」

声のした方に胡乱な目を向けた副島孝介は、コーヒーマを持って近づいてきた、ひよる長い男の姿を認めた。

「俺に話してみ。子供あやすのは得意なんだ。こう見えても俺、保育士の資格持ってたんだぜ。おうっと！ あやす以前に子供が俺の顔見て逃げるのがシヨックだからって嘘つくくじやねえみたいなツッコミは止める。聞き飽きた！」

コーヒーマの湯気の向こうで同じように揺らめいて見える天然パーマの男は能天気な笑顔を浮かべ、どうしてか胸を張る。

「前に甥っ子に訊いたことがあるんだが、俺の顔がアニメのキャラに似てるらしい。そのキャラ見た親御さんから放送局にクレーム殺到したって話だ。曰く『あの磯臭そうなキャラどうにかして！ 鼻腔の奥まで塩がこびり付きそう！』だど。いやはや、相変わらず日本のアニメは世界を牽引してるな。作画のリアリティはどこまで進歩するんだか！」

「……そうと知ってて、なんで髪型変えようとしなんだよ、轍？」
孝介も正確な年齢を知らない男、邑井轍は饒舌に捲し立てる。それだけ気にしているということだろう。孝介はチェアを回転させ轍と正対する。

構って欲しいのはどっちだ、とは思うに留めた。

「最近のストパーは遺伝子構造いじるから金が掛かる。それに、この天パが無くなったら俺のアイデンティティはどこにあるんだ？」

一転、轍は二ヒルに笑ってコーヒを一口啜る。苦々しく表情を歪めた。

「ふっ、話が逸れちまったな。君の話を聞こうじゃないか」

「誰かが自虐ネタ滑ったせいで空気止まってるがまあ気にせずいこうか。簡潔に言えば………そうだな、日本人の国民性について」

日本人は危機感に疎い、と他国の人々は口を揃える。

世界では今、国際的な緊張が高まっている。アジアや中東の核保有国が結託し、共同で新たな核兵器開発を進めているという情報が流れたのだ。

国連からも即刻中止するよう声明が出ているが、それらの国は一向に開発を止めようとしない。国際平和機関に属する平和維持軍が軍事制圧するのも時間の問題である、という見解がマスコミの大勢だった。

そんな状況であるのに、改めて外に目を向ければ、買い物に興じる人々は気楽な笑顔で語らっている。日本が戦争放棄を基本理念とした国家であるのに加え、過去唯一の被原爆国家であることを盾に欧米諸国からの圧力を撥ね退け戦闘の不参加を明言したのも、今な

お一般人が気楽でいる理由の一つだろう。

しかし、国民の問題意識が低いと揶揄されるのは、この辺りの態度が原因となっているのは間違いない。

「小難しいこと考えやがって。んなことウダウダ言ったところで眉間の皺が増えるだけってな。もつとアホになれよ。根暗がバレるぜ。コーヒーでも飲んで呑みこんじまえ」

轍は何者かに手招きした。

応じるように近づいてきたのは、ドラム缶と同程度の寸法をとる銀色円筒形の物体であった。磨き抜かれたアルミニウム製の円筒は、接地面に取り付けられた四つの球状回転機構で自在な方向転換や速度制御、姿勢制御を可能にし、デスクや床に積み上げられた書類を巧みに避けながら二人の元へとやって来た。

「ミラちゃん、この真面目腐った哀れな男にコーヒー出してやって今の顰め面が潰れるくらいトビツキり苦いのをよろしく」

『かしこまりました』

ミラと呼ばれたその物体はロボットだった。

注文を聞くと正面にある発声器から機械音声で返事をし、動力確保のためのソーラーパネルが埋め込まれている頭頂部のライトが緑色に点滅して正常に記憶した事を告げる。

ドラム缶に似た胴部には開閉する箇所があった。人でいう手と同様の機能を果す物理作業用の強化炭素繊維を束ねたコードがそこに格納されている。

ミラは胴部を回転させて、無数の閉空間計測用赤外線を全方位に照射。反射の有無や戻ってくるまでの時間によって空間を三次元的に把握し進行方向を設定すると、ドリップコーヒーとポットのある区画へ移動していく。

そんな金属光沢を放つミラを見送りながら、しかし孝介は無然としていた。

「……コーヒーくらい自分で淹れるつつうの」

「またロボットアンチテーゼか。今の時代、ロボットいなかったら

生活できねえぞ」

孝介は軽く唇を噛む。轍の言葉通りだったからだ。

最近の住宅はアパートメントすら至るところにロボット用のアクセス端末があり、キッチンなど生活に不可欠な設備をロボットも操作できるように設計してあった。ソフト次第で料理のレシピなどもインストールできるので、キッチンがロボットの独壇場になっている家庭も多いと聞く。

ロボット用端末の無い部屋を探すほうが難しくなった時代の背景には、ロボット普及率の上昇がある。家庭単位で見た場合、途上国ではまだ百パーセントに届いていないところも多いが、先進国ともなれば家庭に複数体は当たり前。経済の中心であるアメリカに至っては核家族一人当たり一体のロボットを購入している家庭も少ないのだ。

過去の国際問題の折、先進国として模範的なイニシアチブをとることのできなかった日本が、今も先進七カ国に数えられる大きな理由。その一つが、このロボットを実用化した工学技術であった。

かつての精密機械工学の師、オルテガ「ラクスネスが開発したロボット用のAIを実用できる機構を各国の技術者たちは模索してきたのだが、長年に渡る研究開発をもつてしても、時代性を無視したようなオーバーテクノロジーAIの演算機能に対応できるだけのものには手が届かなかった。

しかし、それを成し遂げたのが日本の企業「IAC」である。

この企業は、高性能ICチップなどの精密機械を開発する傍ら、ロボットの開発研究も進めていた。そのIACが十一年前に発表したのが、現在世界各国に普及している「works965 OL」シリーズである。副島の視線の先、赤外線により電気ポットに指令を伝え、カップに湯を注いでいるミラもこのシリーズに含まれる機体だ。

著作権フリーとなっていたオルテガ「ラクスネスのAIを基にし、二足歩行のような製作コストの掛かる機能を排した「works9

65「OL」シリーズは、発売当初の価格も比較的安価に抑えられていた。企業の開発競争も盛んになった昨今は、さらなる価格競争により値段が下がっている。

当初こそロボットに頼る事に抵抗のあった人々も、いち早く購入した新奇好事家の情報発信によってその利便性に魅せられ、今ではロボットに依存して生活している。

それが、今の世界の姿だった。

「科学が発展するたびに人は怠惰になってく。盛者必衰とはよく言ったものだ」

「古典を引用したところで、人の考え方なんざそう簡単に変わらねえさ。そうだな、文藝復古大好きなお前にはこの言葉をくれてやる」

コーヒーで唇を湿らせた轍は一つ咳払いを挟み、言った。

「『体育の授業の時に一人だけブリーフを穿いてるヤツは間違いない。渾名がブリーフになる』！ どうだこの俺の表現能力！ 恐れ入ったか！」

「ああ恐れ入った。日本にこんな語彙の少ない大人がいるっていう事実には震えが止まらない。ほれ見てみ、この鳥肌」

「オウ、チキンスキン！」

孝介は本気で轍の将来が心配になった。その空気を察したのか轍はもう一度咳払いすると、気を取り直すように話を戻した。

「ともかくだ。ロボット工学の先駆国である日本に暮らす人間が、ロボット嫌いである。日本はなあ、第二次世界大戦直後には四次元構造を概念的に検証してロボットに実装させようとする研究が始まってたんだぞ」

「……んなアホな」

四次元構造の解明は現代科学の一番の難題とされており、多くの研究者によって様々な論文が発表されている。しかし、そのどれもが信憑性に乏しく、絶対の真実として市民権を得るまでに至っていない。

もしも轍が言ったような研究が第二次大戦直後なんて時代に行われていたとしたら、多大な学術的意味を持った史実として残っていてもおかしくないはずだが、孝介はそんな話を聞いたことがなかった。

それに類するような事柄にも思い当たらず首を捻っていると、轍は得意げに続けた。

「そのシミュレーションがなんと、紙媒体で行われたっていうから驚きだろ。その研究は漫画という日本の大衆芸術にカムフラージュされて、逆に人に知られぬまま進行していたんだ！」

真面目に聞くのを止めた。

「タイトルは確か『ホラえもん』とか言ったか。主人公のホラえもんが居候してる家の一人息子に実はポンコツな秘密道具渡しつつホラ吹き込んで、ボスガキの返り討ちに遭ったところに止めの一言『あんまり他人を信用するもんじゃないよ』と教訓を与える、教育色バリバリの漫画だな。コイツが人気爆発した時にや、いつシミュレーションだとバレるか研究者も肝を冷やしたらしい」

「親からクレームが来なかったことに驚きだ」

孝介はますます日本人の国民性が分からなくなった。

「『ホラえもんは法螺吹きだ』なんてパラドックス付きだぜ」

「とりあえず謝った方がいいんじゃないか？ 数多の知識を積み上げてきた先人に」

「それでよ」

「聞いちゃいないのね」

「このホラえもんってのが四次元空間に道具を格納する高性能口ポットだよ。しかも、鼠に齧られた悲しみで体色を変化させるみたいなアバンギャルドな感情表現機能を搭載してたんだ。画期的だろ？ ちなみに好物は『法螺焼』。法螺貝のつば焼きってやつだ。つうか法螺貝って食えるんだなあ」

これは俺の突っ込み待ちなんだろうか、と孝介は轍の頭を叩いてみる。すると轍は驚いたように目を見開いて、こちらを見た。

「き、嫌いか！ そんな引つ叩くほどロボット嫌いか！！」

「だいぶ食い違っているが、まあそう理解してもらっても構わん」

冷めた対応に氣勢を削がれたのか、轍は肩を竦めると息をついた。続いて、真っ直ぐこちらと目を合わせる。

そこに何も考えていなさそうな今までのおちゃらけは見当たらなかった。

一転して真面目な雰囲気、孝介は息を呑んだ。

「そこまで嫌うのには何かしら理由があるんだろうが、……そろそろ意地張るのやめないと、お前が周囲から叩かれることになるぞ」心配してくれているらしい轍の言葉に、不覚にも感じ入るものがあつた孝介は目を伏せた。いつの時代でも、集団において人は少数の者を排除しようとする心理を得る。古くは宗教や民族に関連した問題がその大多数を占めていたが、現代社会での排斥対象はロボットアンチテーゼの人々になりつつあつた。そんな世論を鑑みての配慮だ。

轍が桜井探偵事務所に勤め始めたのは四年前。どういった経緯でこの事務所に来たのかは不明だが、子供をあやすのが得意だという言葉や保育士の資格を保有しているという自己申告は確かに本当なのだろう。子供が逃げるとは言うが、それにも拘わらず保育士を志したことにこの男の本質があるように孝介は思う。

本当に楽天的なだけの人間だったら誰も寄つて来はしまい。

孝介は、轍と話している時の自分が驚くほど平静なことに気が付いた。一緒にいて心休まる人間というのは貴重だ。これも彼の人徳に違いなく、轍の認識を孝介は改めた。

「……確かに、そうだよな」

そこへ、扁平な頭部にコーヒークップを載せたミラがやって来た。カップの中の黒い液体には波紋一つ立っていない。

轍の心遣いに報いてやるためにも、湯気を立てるカップを受け取った孝介はロボットのミラに対してこう言った。

「……ありがとうな」

『どういたしまして』

素っ気ない音声に慣れるには、まだ少し時間が掛かりそうだった。浮かんだ苦笑を呑み込むようにコーヒーに口をつける。

その時、轍が口端を吊り上げたことに孝介は気付かなかった。

「っ！」

噴出さないようにしているために、腹を抱えて爆笑している轍に文句を言うことも叶わず、どうにか黒い液体を舌に触れさせないよう喉に流し込むと、孝介は叫んだ。

「にげええ！」

孝介が桜井探偵事務所に拾われてから、かれこれ十二年が経つ。

両親が会社の業務中の事故で死亡したのが九歳の時。

過労認定をさせようと弁護士が裁判を起こしたが、会社側が親の勤務記録を抹消していたため、認めさせるには至らなかった。結局労災で入ってきた金さえ弁護士に搾り取られ、後に残ったのは両親が積み立てていた定期預金だけ。

おそらく弁護士も本気で勝てると思っていなかっただろう。ただ、いい金づるがいたから寄って来たただけだ。

家の中にいるのが嫌だった。昨日まで三人で暮らしていたはずの我が家にはしかし、帰ったところで自分以外の誰もいない。耳に痛いほどの沈黙の中できつく目を閉じ、気付くと朝になっている。目覚めたくないと思うのに目が覚めてしまう自分が恨めしかった。

両親が勤めていた会社——IAC。

ロボット稼働実験中の事故だったそうだ。実験中に何らかの理由でロボットが暴走し、詰めていた研究員を皆殺しにした、と。

その研究員の中に両親も含まれていた。

当時のロボット研究はIACの中でも極秘裏に行われていたらしく、会社側からの情報統制によりニュースになることすらなかったが、それはそれで良かったと思う。自分の両親が死んだという二

ユース原稿をキャスターが無感情に読み上げる場面を想像したら、吐き気を催した。

家の中には両親のことを否応無く思い出してしまう、と外へ飛び出してみても、そこには信用なんてとてもできない他人という悪魔が溢れている。内にも外にも灯火はなく視界は闇に染まった。気付くと人気のない路地裏に飛び込み、家と同じように闇の中で蹲っていた。

そこから孝介を無理矢理引っ張り上げたのが、当時小さな探偵事務所を立ち上げたばかりの男。年齢に似合わずがっしりした体型の、桜井源三郎という中年男性だった。

暴れる孝介を笑顔で昏倒させると、次の孝介の記憶は事務所のソファから始まる。

その時は一瞬誘拐かと身を強張らせたが、よく考えてみると自分は誘拐されても何ら問題がなかった。

それに自宅に帰らずとも源三郎は食事を三度与えてくれるし、寝床も提供してくれる。

孝介も次第に心を開き、その後正式に養子として引き取られた。

高校を卒業して以降は源三郎の手伝いをするようになり、助手という肩書きを得て今に至っている。

「……………ふう」

不意に己の過去を追想してしまったのは、あれだけ嫌悪していたはずの人ごみの中を歩いているからか。もしくは轍に己の感傷を諭されたからか。

午後五時。燃えるような夕日の朱が他の色を包み隠す時間帯だ。昼から夜へと変わるこの時間には全てのものが一つに溶けあう。おそらくは、今と昔の記憶すらも。

しかし、孝介が脳裏に描く過去と明確に違うものが、現代には二つある。

人々と並んで移動している多数のロボットの姿と、空の厚さだ。中国の産業排気が偏西風に乗り日本上空を覆うことで、十二年前

と比べてもより厚く、低くなった空。昼間に見たなら白くなっていることも分かるだろう空を見上げながら、孝介は自宅への道程を進む。

車道を排した大通りには多種多様な店舗が軒を連ね、所どころには露店も並んでいる。

そこを歩いていた時。

「ちよいとおそこな」

通り過ぎようとしていた孝介に横合いから囁れた声が掛かった。

目を向けると露店の一つ、中古の家電製品を扱っている露天商の男だった。

地べたに胡坐をかく男の年齢は明らかに還暦を超えている。

薄汚れた長衣。あらゆる毛が伸ばしつ放しにされた風貌は、古代中国に存在したという仙人を髣髴とさせた。

ある程度の清潔感を保っている他の露店と比べて明らかに小汚いその一画には人が寄り付かず、空間がぽっかりと空いてしまっている。

そんな浮浪人らしき老体に声を掛けられ、孝介は足を止めつつ眉を顰めた。

長い髭や眉毛によって口元や目元が隠され、表情は読み取れない。しかし孝介が反応をした際、老人の髭が揺れたように見えた。

「ちこう寄りんさい」

手招きされては立ち去るのも忍びない。押し売りを断れない年でもないだろうと腹を括り、老人の方へと歩を進めた。

「……何か？」

「いやのう、あんさんがえろう景気の悪う顔しとったもんで。老いばれとしちゃあ黙つとれんかったんさ」

ゆらゆらと髭を揺らす様子に孝介は溜息をつき、

「……それだけでは無いんでしょう？」

仕方なく先を促す。

「ふおつふお、話を省けて助かるわい。この年になるともう喋るの

も億劫でなあ」

なら話しかけなければいいだろう、と孝介は内心悪態をつく。

「何か、買っていかなかえ？」

「結構です」

きっぱり断り、孝介は老人に背を向ける。視界の端に一瞬捉えた老人はしかし、髭を揺らしていた。

何故か寒気を感じて早足になりかけたところで、予感的中する。

「あんさんに、そりやあ似合いのものを置いとるんだがのう」

その言葉は、一つの商売が生死を分ける露天商の常套文句だったに違いない。

なのに孝介は、今の言葉にそれ以上の意味を疑ってしまった。

年功による言葉の重みがそう思わせたのかもしれない。まるで自分の中身を見透かされているような薄気味悪さが、孝介の足を速めるのでなく逆に止めてしまった。

「ふおっふお。そう急くなえ、若人」

「……………」

黙って再び近づいていくと、老人が緩慢な動作で立ち上がって背後を向く。

そこにあつたのは下に何か隠してあるらしい青いビニールシートだった。老人はそれをゆつくりと引いていく。

現れた『それ』を見て、今度こそ孝介は気味悪さに背筋を凍らせた。

円筒形のドラム缶のような物体。磨きぬかれた金属光沢は鏡のように夕焼けの世界を映し、孝介の強張った表情まで見せ付ける。

『それ』は世界を変えたもの。今も孝介の周りを動き回っているものの。

そして、孝介が遠ざけ続けていたもの。

「どうかのお、自慢の一品なんじゃが」

老人の示した『それ』は——ロボットだった。

「流行りものらしいのじゃが、どうも誤作動が多かったそうでのお。

「買い方を探しとったそうじゃけえ、わしが安く買い取ったんじゃあ誰から、とは言わなかった。」

轍との会話が思い出される。あの会話で轍は、ロボットを嫌い、世界の流れから取り残されつつある孝介に、ある種の警告をした。

——いつまでもロボット嫌いのままじゃ世間を敵に回すことになる。対して自分は何と返答したか。

——確かに、そうだよな。

こう答えたはずだ。

今日は孝介の中で大きな意味を持つ日だ。それを孝介自身も自覚している。

何せ、これまで十二年間忌避し続けていた物に、自ら手を伸ばさうとしたのだから。

そして今。伸ばした掌の中にするりと『それ』が滑り込んできた。恐ろしいほどにタイミング良く。

まるで、何かのシナリオに沿っているかのように。

「どうじゃあ、このみすばらしい手に磨かれとうたとは思えんじゃろっ?」

ちこう寄って見んさい、と手招かれるままに孝介はふらふらロボットに近づいていく。

表面の艶からは新品としか思えなかった。外見から判断できる特徴を取ってみても、確かにそれは今現在世界各国で最も出回っている機種『works965、OL』シリーズに間違いない。しかし、機体の頭頂部後ろ側に書かれている機種名には、

「『OR』……………」

数多ある他の機体とは明確に違う表示、『works965、OR』と書かれていた。

『works965、OL』の『OL』とは、高性能AIを開発したオルテガⅡラクスネスのインシタルをとったものだ。

単純に見えるこのミスにも何か意味があるのかと問いの目を向けてみるが、老人は相変わらず目と口を隠している。気付いていない

のか、気付かないふりをしているのかさえ分からない。どちらにせよ、答える気配はなかった。

その代わりに、別の言葉が孝介の耳朵を震わせた。

「わしの見立ては正しかったかのう？」

鼓膜にじわじわと沁みこんでくるような声を聞いた孝介は何かに操られているように、気付けば首肯していた。

ふおっふお、と楽しい老人の笑い声。続けて言った。

「五千円どうかえ？」

孝介は頭を跳ね上げて老人を見る。現在の『works965』OL』シリーズの相場は八万円前後と発売当初に比べて大分値段が下がった。しかしそれでもまだ八万なのだ。どんなに安い中古品でも桁を一つ下げることなどあり得ない。

不良品か粗悪品か。ややもすると、近頃アジアの一部で出回り始めている『works965』OL』シリーズの海賊版かもしれない。

「……どういうカラクリです？」

「誤作動が多かったと、はじめに言っただけ若人。老いぼれの言葉はどんな与太話でも聞いておくもんじゃない」

「……………」

孝介は沈黙を返すしかない。

向こうが値段を提示したのだから、もう交渉は大詰めだ。後はこちらがイエスかノーかを答えるのみ。

孝介はしばらく沈黙を保ち、その間老人は愉快そうに髭を揺らしやがて、孝介の唇が動いた。

住宅街の中でポツポツと伸び上がっているマンションの一室、1LDK。そこが孝介の自宅だ。

源三郎の助手としてそれなりの金額の給料が支払われるようになって、孝介は一人暮らしを始めた。ちょうど二十歳になりたての頃

で、物件探しから自分でやりたかったのだが何かと孝介を構いたがる源三郎が優良物件を先に確保してしまった。

養父の気遣いを無下にもできず、以来そこで暮らしている。

当時新築だったこのマンションは駅から多少遠い立地条件もあって賃貸料が安かった。加えてこの広さを考えれば十分に費用対効果でいい値を弾き出すだろう。

ただ。

こちらにも例に漏れず、至るところがロボットの操作可能な設備となっていた。

入居当時はロボットに関するもの全てを目に入れないようにしていたので、日用家電はロボット用端末が無い製品を中古品屋で確保した。

しかし、それらはとうに生産中止になっており、製造年を見る人に郷愁を与えるほど年季の入った代物だ。それもあって最近、不具合も多い。寿命が近いのだろう。

随分と俗的な、しかし何より生活に密着したこの問題は、まだ肯定しないまでも、孝介にロボットへと目を向けさせた一因とも言えた。

ところが、実際に自分の部屋にロボットがいる光景など想像できない。

事実、自宅のはずの空間が、まるで他人の部屋のように見えた。

「……………そんなにすぐ変わるものでもないよなあ、心って」

感情と理性が対極に位置することを孝介は身をもって実感していた。

溜息をつき視線を上げれば、家の中の端末の位置を把握しているのか、忙しく動き回る金属製の円筒形が見える。

自分の部屋にロボットがいた。

結局、先ほどの露天商から買っていたのだ。五千円ならポケットマネーから出せだし、向こうもその程度の値段に当たりをつけて言っただろう。しかも五千円なら、いざ不良品となった時でも精神

的ストレスが少ない。

孝介はそんな、状況と裏腹な鬱屈したことを考えていた。

やはりまだ、ロボットと生活を共にするという事に抵抗がある。確かに一人ではこの家の広さを持て余していた。ふとした時に一抹の寂しさを感じたりもした。でも、いざそこに自律的に動く何かがいるとなるとこんなにも鬱陶しく、しかもそれが未だ心にしこりを残すロボットであるためなのか、尚更煩わしく感じてしまった。

長い年月をかけて凝っていたこの暗い感情は、一朝一夕の感情変化では到底太刀打ちできるものではない。

これからはこのロボットとともに生活しなければならない。自分で買っておきながら義務的なことを考えるのは、感情の自己防衛本能だろうか。己から手を伸ばすには時期尚早だと、心が伝えているのだろうか。

懷から一枚の折りたたまれた紙を取り出す。ロボットを買い取る際、老人から『取り扱い説明書のようなものじゃ』と渡されたものだった。

内容は以下の通り。

『――其は願う者

――遠来より来たりし遺風を纏い

――地雨にその身を枯らすことなく

――末世に救いを希う者

――此の者と共にあるべき者

――雨露に光を奪われようと

――廃ることなく光を求め

――決してその身の朽つることなく』

……これのどこが取り扱い説明書だ。

何度読み返しても、ただの詩文としか思えなかった。

その詩文の書かれた紙の下の方、申し訳程度にロボット読み込み用の多情報同時発信赤外線チップが埋め込まれていた。

……どうすんだよ……。

天上を仰ぎ見て、力なく紙をひらひらと揺らす。

見えない己の行く末に、孝介はもう一度盛大な溜息をついた。

しかし、自身にも届くほどの呼気音を出したはずなのに、音は鼓膜には届かなかった。

ドガアン！ という轟音が、それを掻き消したからだ。

「な、何だ……？」

音のした方に目を向けると、そこで孝介は信じられないものを見た。

「……………」

束の間だけ面食らい、絶句。

「……………ぷっ」

やがて、そのシュールな光景に笑い声が漏れた。

——ロボットがフローリングの床で転倒し、起き上がろうとモゾモゾ蠢いていた。

「は、ははははっ！」

最近の家庭では、褒められないことをした子供を躾ける際にロボットを引き合いに出すという。それはつまり、ロボットが人の言いつけを守り、完璧に仕事をこなす存在だということが、人々の間で通念になりつつあるということだ。

しかし今、そのロボットが孝介の前で見事に転倒した。綿密な力学計算を繰り返し、絶対的な安定性と安全性を確保されたはずのロボットが、転倒というまず考えられないミスをしたのだ。その上、ロボットは起き上がることに手間取って悪戦苦闘している。

孝介は笑いが止まらなかった。

やがて、向こうの方から機械音声を掛けてきた。

『助けて下さい』

事務所で聞いた、仕事を例外なく完遂するミラのものと同じ機械音声のはずなのに、言っている内容が天と地ほども異なるせいで、こんなにも違って聞こえる。

先ほどの不安が嘘のように、孝介は安堵していた。

もしここにいるのが、全ての命令を何事もなく遂行してしまうロボットであつたなら、きつと何かしらの理由をつけて放棄していただろう。

——これだけ完璧なくせに、どうして両親は死んだのか。

今のロボットの完璧が、両親の犠牲の上にあるということとは、頭では理解している。それは誇りとしてもいいほどの偉業に違いない。しかし見当違いだと分かっているても、未だに消化し切れていない陰鬱な感情はどうしようもなかった。

……でも、こいつなら。

『誤作動が多い』らしいこのロボットなら、孝介も何だか許している気がしていた。

これは一種のリハビリなのだ。

孝介の心も自己防衛本能から開放されて、今は平静を取り戻している。

……これからゆっくり慣れていけばいいか。

そう思つて立ち上がる。

まるで誰かの助けを待っているかのように床を転がっているロボットを、人である自分が助け起こすために。

第二章

明くる日。

昨日の自宅での騒動を思い出すと苦情が来てもおかしくなかったことに、今さらながら冷や汗をかき、しかし今朝の起き抜けの気分は悪くなかった。

「そついや所長って、いつ戻ってくるんだっけか？」

「あと一週間は帰ってこないだろ」

朝十時に出勤した孝介は、既に到着して書類の整理などをしていた轍と雑談していた。

話題は、所長である桜井源三郎のこと。

「随分と急な話だったよなあ。いきなりの電話一本でニューヨーク長期出張とか、俺だったら絶対断る」

「この仕事やってたら、依頼を断るってことがどんだけ死活問題になるか分かってるだろう。ただでさえ最近は依頼が少ないってのに」
元々がそれほど需要のある生業ではない。そのため謝礼金も高く設定せざるを得ず、さらに敷居が高くなるという悪循環が起こっている。

しかも近年、ロボット技術の進歩に平行して進化し続ける科学技術を最大限活用した高性能防犯設備が多く開発されている。それらをリースするリース会社も相次いで起業したお陰で、他国と比較して低かった日本の犯罪発生率は、より一層低下した。

不謹慎な話だが、そのせいで自分たちの仕事が減った部分は確かにあった。

そこに来た、ニューヨークへの出張の話。

相当に報酬が良かったらしく、源三郎は一も二もなく飛びついた。
源三郎がニューヨークへと発ってから、今日で十五日目。既に二週間が経過していた。

「その間に来た依頼は、できそうなものなら俺たちで引き受けても

いいとは言ったが、二週間経って一つもないってのはどういうことだ！」

「それがこの業界の現状だ。諦めろ」

言いつつも孝介は轍と同じ気持ちだった。これまで孝介と轍の二人は源三郎のサポートに徹していた。初めて自分たちに仕事が任せられるということに責任を感じつつ、一方では胸躍らせてもいたのだ。そんな気持ち表情に出ていたのか、轍はこの話を急に終わらせると、自分の鞆からおもむろに財布を取り出した。札入れを開いて、空のそれをひっくり返す。

「あーやばい。ちょーやばい。財布の中が寒くって凍えちまいそうだ。知ってるか、一昔前に流行ったらしい風水って占いじゃあ、財布に蛇の抜け殻入れとくと金運が上がるんだってよ」

「眉唾だろ」

「きつと蛇の抜け殻を財布に入れることで、変温動物である爬虫類の性質を財布に転写するんだろうな。そうすれば財布が寒くてもヘツチャラさ！」

「だから人の話を聞け。てか、それじゃあ根本的解決にはなっていない」

蛇が憑いてるのはお前の頭の方じゃないかと疑いつつ、蛇革製の財布を愛しそうに胸に抱いてクネクネしている頭髮メデューサ系な男から視線を外した。

その時。

キンコン、と事務所の扉に取り付けられたチャイムが鳴った。

「失礼します。こちらが桜井探偵事務所ですよろしかつ……」

扉を開けたのは、紺色のスーツを着こなしている秘書然とした妙齢の女性だった。

二十代半ばに見えるが、孝介と同年代と言われても十分に納得できる。髪を後頭部で結っており、伶俐で、かつ大人しそうでもある涼しげな目元を覆うように赤いフレームの眼鏡を掛けていた。

その女性は、取っ手に手を掛けたまま静止している。その視線は

間違はなく奇妙に体をくねらせる轍に向けられていた。

「……た、はずありませんよね。失礼致しました」

と、すぐに扉を閉めてしまった。

「……………」

二人で沈黙を重ねる。それから同時に叫んだ。

「仕事の依頼だ！」

「金の臭いだ！」

突っ込んではいられない。二人は急いで女性の後を追った。

「待って！ 待ってください！ 合ってます、ここで合ってますから！」

「金との出会いを待ってますから！」

「お前は黙れっ……！」

エレベーターの前にいた女性は大音声に振り向くと、いきなり始まったどつき漫才に目を白黒させていた。

来客用のソファに女性を座らせ、自分たちも対面に座るとミラにコーヒーを持ってきてもらった。

テーブルに置かれたコーヒーを勧めると「頂きます」と言いながら女性は口をつけず、決まりが悪そうに顔を紅潮させていた。どうやら先ほどの格闘系漫才にうろたえてしまったことを恥じているらしい。

それ以上に顔が赤くなっている人間が目の前にいるというのに。

孝介は顔の熱を治めようと自分の分のコーヒーに口をつけ余計に顔が熱くなり、アイスにできなかったことを後悔した。

元はといえば轍が突っ込まざるを得ないような言葉を発したのが原因だというのに、三人の中で一番平然としているのは轍だった。理不尽なものを感じつつ、ニコニコしている轍に話を振ったら何を言い出すか分かったものではない。

孝介は気を取り直すと、正面の女性に問い掛けた。

「それで、どういったご用件でしょう？」

「は、はいっ」

焦ったような声を出した女性は、どこか取り乱したようにオロオロしていた。

しかし、返事をしてからの女性は素早かった。ずり落ちた眼鏡の位置を直し、一つ咳払いを挟んでから胸ポケットから名刺を二枚抜いて渡してくる。

「私は世界平和機関日本支部の近藤董と申します」

手っ取り早く自己紹介を済ませた。

しかし、それを聞いた孝介は眉を顰める。

……世界平和機関？

世界平和機関とは、世界標準の平和の実現、またその恒久的維持を目指す国際機関だ。平和維持軍もこの機関に属し、軍を持つていることから分かるとおり各地の紛争解決などを軍事力で解決することも辞さない、強硬な姿勢で知られる組織だった。

そこに所属する人間が、事務所を訪ねてきた。しかもこんな、中東とアジアの核共同開発問題で平和維持軍の話題には毎日事欠かない時期にだ。

……臭いな。

これはさすがに自分たちには荷が勝ちすぎるかもしれない。

女性——董は、そんな孝介の内心に構わず話を進めた。

「お察しかと思いますが、本日は依頼があつて参りました」

平坦になった声音に、孝介は姿勢を正した。

「一昨日、長野県と新潟県の県境にある妙高山麓にて発生しました『とある事件』をご存知でしょうか？」

とある事件、なんて暈した言い方をされては、分かるものも分からない。しかし話の流れを止めるのもどうかと思い、文句は喉元で押さえ込んだ。

「……いえ、存じ上げませんが」

一応隣の轍に目を向けてみたが、首を横に振るだけだ。

「一晩に、年齢も国籍もバラバラな十六人が殺害されました」

孝介と轍は揃って息を呑んだ。それを見ても、董はあくまで淡々と続ける。

「被害者の身辺調査をしたところ、共通点として被害者全員が『イスラエル』というキリスト系の宗教一派に属していたことが判明しました」

「『イスラエル』……っっていうと、あの中東にある国か？」

孝介が呟きに、いや、と否の声が続いた。

「……『イスラエル』。最後まで神に挑み続けた男の名だな。確かヘブライ語で『神と争う者』だったか」

横合いから、聞いた事のないほど落ち着いた男の声が聞こえてきた。董の他にも、まだ他に誰か来てたのかと周囲を見回してみたが誰もいない。

いや、見間違えるほどに雰囲気を変えた男なら、いた。

邑井轍。

いつもふざけて周りを巻き込むだけのはた迷惑ボケ担当だった轍。つい先ほども能天気ニコニコしていた轍が、顎に左手を当てて、何やらブツブツと呟いている。董が轍に視線を向けていることからして、今のセリフを言ったのは轍で間違いないだろう。

孝介は瞠目した。まさか轍からそんな真面目な知識が出てくるとは思わなかったのだ。

しかし、董の「ええ、そうです」という肯定の言葉をもって現実に戻った。

「『神と争う者』と自分たちを銘打って、切磋琢磨の末に少しでも神に近づこうとしていた宗教団体のようです。とは言っても、生贄を差し出して天使でも悪魔でもない何者かを召喚し人の身体からの脱却を図る、という歪んだ信仰の形態からして、どうやら悪魔崇拜に近かったようですね。実際に教会に問い合わせてみたところ、やはり『イスラエル』は異端扱いでした。いずれ神の裁きが下る、と憎らしげに語っていました」

「その宗教団体が一夜にして壊滅したと、そういう事ですか」
きつと教会の人間は得意げだったに違いない。

「ですが、少し奇妙なんです」

孝介と轍が首を傾げている前で、董は脇に置いていた鞆の中から数枚の紙を抜く。それをテーブルの上に置くと、二人の前へと軽く押し出した。

滑り込んできた、その紙にあったのは――。

「遺体の写真です」

「！」

孝介は一瞬だけ身を強張らせた。源三郎の助手として幾度か死体の写真も、さらには本物の死体まで見たことはあったが、幾ら経験しても慣れるものではない。ところが轍は少しも動じていなかった。苦し紛れに孝介も死体の写真をまじまじと見る。

「……………ん？」

見てみると確かに違和感があった。これまで見てきた死体の写真となると、もつと目を刺激するような色があったはず。なのに、これらの写真は、ともすれば人が眠っている写真ではないかと言われなくても信じてしまいそうな落ち着いた色合いだった。

そう。

「出血が無い？」

「その通りです。さらに言えば、外傷すら見当たりませんでした」
董は死体の写真を並べ、

「司法解剖の結果、死因は全て心臓麻痺でした。どうも心臓にピンポイントで強力な電気ショックが加えられたようで」

「そんなことが……」

できるのか、という疑問のセリフは最後まで続かなかった。

孝介は――いや現代に生きる全ての人間なら、そんな所業の為せる犯人に心当たりがあるのだから。

「……………まさか」

思考の結果、鼓動が加速度的に早まっていく。

しかしそれは、現代社会ではあり得ないと一笑に付されるほどの愚かな推測だ。それしかないと思いつても、人々は決して認めはしないだろう。今はそういう社会なのだ。

「ええ。恐らく、ご想像の通りかと」

それでも返ってきたのは、孝介の推測を肯定する言葉だった。

眠ったように息絶えている死体の写真の上で、緊張を伴った三人の視線が交錯する。

「私たちは、この事件をロボットによる殺人事件として調査を進めています」

「……っ」

確かにロボットなら、三次元座標を特定し、そこに周辺の電子を集中させプラズマすら起こすことも可能だ。

ロボットは基本的な情報送受信手段として赤外線を利用しているので、赤外線の熱作用により空中の電子を活性化させ誘導することは容易なはず。その上、電気的中性を維持しなければいけないプラズマが起こせるほどの電子操作ができるのなら、局部的に電流を流すことなど訳ないだろう。

聞いた孝介は唇を噛む。轍がチラリとその様子を見たことには気付かなかった。

「現場にロボットは残っていませんでしたが、そう考えれば話が進むんです。何せ、人間味がないほど現場には物的証拠が無かったのです」

教会の言う神の裁きが、人間が創り出したロボットによって下された。宗教家にとってこれ以上の皮肉も無いだろう。

ここで轍が質問を挟んだ。

「ロボットが犯人の可能性がある、というのは分かった。でもどうして、この事件に国際平和機関が介入しているんだ？ 警察のサイバー犯罪課にでも任せるべきだろう」

「その理由は、お分かりでしょう？」

もう一度、孝介は血が滲むほど強く唇を噛み、事務所内の掃除を

始めたミラに視線を飛ばす。

「――過去に例を見ない、初めてのロボット犯罪、ですか」

「ええ」

孝介の両親が開発途中のロボットの暴走によって殺された事件。

それはIACによって闇に葬られている。もしかしたら、その後起きたロボットによる事件も様々な情報統制によって揉み消されてきたのかもしれない。それらを知りうる機会のなかった国際平和機関に勤める董にとって、この事件が歴史上初めてのロボット犯罪なのだ。

「これは歴史を塗り替える事件です」

失礼な話だが、重大そうに語る董が滑稽に見えた。

それにしても、国際平和機関が把握した今回の事件すらニュースで流れないということは、今度は国際的な規制の圧力が掛かっているということになる。

つまりロボットによる犯罪が、無辜の人々には知られていないまでも、既に各国の首脳や国際機関の上層部の人間たちは知るところとなったということに他ならない。

確かに、ロボットによって人が殺されたなんてニュースが世間に流れば、ロボットを所有する人々の間で大混乱が巻き起こることは間違いない。

「人がロボットを創造する時、そこにはアインシュタインコンプレックスが付き物です。オルテガ」ラクスネスもこの例に漏れず、彼の開発したAIには幾つかの基礎プログラムが設定されていました」
「第一条『人間に危害を加えてはならない』、第二条『人間に服従しなければならない』、第三条『この二つ以外の場合において自身の身を守らなければならない』、だろ」

「ええ。そして、この基礎システムは絶対に覆ってはならず、そのためAIにはプログラム改竄防止用の強固なプロテクトが掛けられていました。それすら超えてロボットが犯罪を起こしたということは、何者かがそのプロテクトを解除し、マスタープログラムを変更

したということです。ロボットと言っても、あくまで機械なのでから、自ら犯罪を起こすということは絶対にあり得ません」

董は一度言葉を切り、孝介と同様にミラへと視線を向けた。

「また、これが単独犯による犯行だとは考えられず、警察はこれを大規模組織が裏についたサイバーテロ行為と判断しました。そういった経緯で現在、この事件の捜査権は世界平和機関に委譲されています」

董は一息ついて、ここで初めてテーブルのコーヒークップに手を伸ばした。音を立てず上品に飲む。カップから唇を離れた後、カップに付いた口紅を拭うことも忘れない。

一方の孝介と轍は気を抜けなかった。

これまで董が話したのは、ただの事件のあらましに過ぎない。桜井探偵事務所に来た真の理由は、この後に語られるはずなのだ。

二人はじつと待っている。董が話し出すのを。

しかし、カップを置いた彼女は、しばらく黙っていた。

一分ほど静寂が続き、孝介と轍が顔を見合わせた時、唐突に董は口を開いた。ただそれは、事務所の壁際に所狭しと並べられた高い本棚を眺めながらの言葉だった。

「たくさん、本があるんですね」

いきなりの話題に孝介は戸惑った。

「？ え、ええ……。ここの所長が極度の濫読家なので、ジャンルも何もあつたもんじゃないですけど」

「桜井源三郎氏ですね。お名前だけはかねがね伺っています」

「え、つと……。一体誰から？」

「上司からです。自分がいつも懇意にしている探偵がいると」

一通り本棚を見回し、董は孝介に視線を戻した。そして、はにかむように微笑む。

まるで悪戯を告白する少女のように。

「正直に申しますと、上司からその話を聞いたびに私は、今のご時勢に探偵なんて必要ないと考えていました。情報通信が発達し、ほ

ほぼ全ての学術フィールドを網羅した知識を電子情報としてネットから取得することができる。そんな時代に人の知識に頼ることは、不確実で非能率的だと。過去にあった冤罪問題などからも正確を期するべき犯罪捜査に人の知識を介在させることに、そこはかといない不安と不満があつたんです」

もう一度、董は本棚を見た。精神医学であつたりエッセイ集であつたり流行の恋愛小説であつたりと、そこには厚さも装丁もバラバラな本が同列に並べられている。

それから苦笑を漏らした。

「ですが、思い切つて上司にその話をしたらこう言われたんです。『知識は知識であつて、それをどこから抽出しようと、それらを組み合わせて知恵としていくのは結局のところ人間なんだ』つて。すごく痛かつた。それまでの私は、自分が頭のいい人間だと自負していましたから、鼻っ柱が高かつた分、余計に」

ここまで聞いていて理解したのは、この告白が後の核心部分を話していく上で意味を持つてくるのだということ。だから二人は黙っていた。

「それからです。探偵つて職業の人に興味を持ち始めたのは。今回こちらに伺つ件も自分から手を上げました」

少女のような笑みを、元の引き締まつたクールな笑みに戻す。

小さな目礼は本来の話に戻る合図だ。

「ここから先は、依頼受諾の返事を聞いてからお話させていただきます」

これまで孝介たちは源三郎の助手として事件を見てきたが、その中核部分に関わることはなかった。もし源三郎がいない今、自分たちで依頼を受諾したとしたら、その責任は全て自分たちに掛かつてくる。いざそんな局面に出くわすと心躍るなんて言っていられず、ただ押しつぶされそうな重圧が押し掛かつてくるのみだった。

董の告白の意味が分かつた。
信用と信頼。

彼女が探偵に対して抱いている想いは興味でもあり尊敬でもあり、なにより信用と信頼なのだ。この判断は、その信頼を裏切らない覚悟をし、信用を違えない覚悟をして望めと言外に言っているのだ。董はもう一言を付け加える。

「本日、桜井源三郎氏がいらつしやらないことは承知しています。私は、あなた方へ依頼しに伺いました」

一旦言葉を切り、続いた言葉は、こうだった。

「あなた方を紹介してくださった人は、その桜井源三郎氏なのです——脳に、全身に、震えが来た。

「現在桜井源三郎氏には、別件でニューヨークへと飛んでいただいています。上司は、その桜井氏から今回の事件の適役をお二方ほど紹介されたそうです。そのお二方の名前が、副島孝介様と邑井轡様です」

名前を呼ばれて、こちらから名乗っていないことを思い出した。それを契機に混乱していた思考が正常に回り始める。

以前から世界平和機関と関係があったらしい源三郎が、自分たちを紹介した。

それを受けて、何の実績も無い自分たちへと本当に依頼を持つてきたということは、世界平和機関が源三郎の言葉を信用しており、それなりの信頼関係が源三郎と世界平和機関の間で構築されているということだ。

ここで断れば、その信頼関係がどうなるか想像に難くない。

「……………」

これまでも、きっと多くの仕事を世界平和機関から貰っていたのだろう。

答えなど、初めから一つしか用意されていなかった。

無言で目の前の董を睨んでみても、凜とした笑みを崩さない。

窓の外を見る。遠く空の果てにいるはずの、五十間近とは思えない豪胆な男に届けとばかりに、浮かぶ雲を睨みつけた。

次いで青白い空を見上げながら考えるのは、己の過去。自分の人

生は、あの事件により方向が決まってしまった。そして、ロボットが暴走したというその事件の真相を、自分はほとんど知らない。

ロボットに関わる事件はこれまでもひた隠しにされてきた。今回の事件もそれに連なるもので、過去の事件に関しても何かしらの糸口となるかもしれない。もしこの事件を追っていったなら少しは真相に近づけるんじゃないか。己の人生を変えた事件の本当の姿を垣間見られるんじゃないか。

これだけ人に大きな影響を与えておきながら、事件の詳細は何一つ自分に届かない。

腑に落ちなかった。

「その依頼、お受けします」

気付けば返事をしていた。勝手に決めてしまったこと、隣で苦笑していた轍には申し訳なかったと孝介は思う。

「率直に申し上げましょう」

書類に諸々のサインをし、契約が成立すると、董は続きを話し始めた。

「我々は『IAC』が黒幕ではないかと考えています」

真の中心にある、核心部分を。

十分に驚きの発言だが、しかしそれには疑問があった。

「……確かにオルテガⅡラクスネスのAIPプログラムの改竄なんて、隠れてできる技術者集団はIACくらいしか無いかもしれませんが……。IACがそんな事をするメリットはなんですか？ 人を殺すなんて危険な橋を渡ってまで得られるメリットは」

「それはまだ不明です。が、考えれば幾つか出てきます」

言いながら董は眼鏡の位置を戻す。

「基礎プログラムにある『人間に危害を加えてはならない』という部分を克服することで……、つまり人を傷つけることができるようになって初めて可能となるビジネス。まず医療用のロボット開発が

考えられるでしょう。外科手術用ロボットは人の身体にメスを入れることから基礎プログラムに反するため、開発ができませんでした」
俯き加減で自嘲ぎみに唇を歪めているところを見ると、これは考えている正答ではないようだ。

「こちらなら、まだ良心的な開発方針なので個人的感情としては許せるのですが、それだったらテストとして人を殺すまではしないでしょう。目的と経過に矛盾が生じますから」

「確かにそうだ。矛盾はロボットにとって最大の劇薬だからな」
轍が応じた。董は頷きで肯定を示す。

「しかし、もう一つの方が危険なんです。こちらなら矛盾も生じず、おそらくビジネスの規模としても医療用ロボットの数十倍は下らないでしょう」

「……それは？」

二人とも、大方の予想はついていた。しかし、本当にそんなものが世の中に出回った場合、世界は混沌に落ちることになる。現実逃避か、もしくは覚悟を決めるためかは自分でも判別できないが、短い時間だとしても、ともかく一拍置きたかった。

そして、答えが来た。

「ロボットの兵器化、です」

「………」

予想していたとはいえ、聞いた二人は言葉が出ない。

自分たちの行動の結果を何も考えていないのか、という憤りと、そこまでして儲けたいか、という呆れ。

「……人の欲は終わりが無い、か」

不意に孝介は呟いた。

「ん？ どうした、孝介？」

「いや、俺もそんな立場にいたら、そうなつちまうのかと思ってさ」
言った途端、頭部に軽い痛みを受けた。轍が頭を叩いたのだ。文句を言おうとして、しかし轍の言葉に遮られる。

「何言っただ、大丈夫に決まっただろ。それを心配してる時点

で、お前は心配ない」

見ると、男から見ても頼りがいのありそうな笑顔を浮かべていた。「そんなもって、そんなお前と一緒にいる俺も心配ない。つつ訳で無問題だ」

こんな男ながらに惚れそうな男のくせに、彼女はいないというから驚きだ。現に、目の前にいる董も、轍にさしたる興味を持っていないように――いや、表現が正しくない。人間として興味深いが異性としては興味を持っていない、というような表情に見える。

頭に揺らめく天然パーマが原因ではないかと疑っているが、確証はない。

「……よろしいでしょうか？」

咳払い付きの董の迂言に、関係ないことを考えている場合ではなかったと孝介は反省した。

「失礼。続きをどうぞ」

では、と彼女は姿勢を正す。孝介と轍もそれに倣った。

「ロボットの兵器化には二つの大きな障害があります。一つは先ほども述べた通り、基礎プログラムに含まれる『人間に危害を加えてはならない』という条文に反すること。そしてもう一つというのがこちらも基礎プログラムにある『人間に服従しなければならない』という条文です」

高度な概念の話で知らず知らずの内に固い表情をしていたらしいこちらを見て、董は一度話のペースを落とした。

「ロボットを兵器とするためには、人に危害を加えられるようにし、その上で人に服従しなければならないという条文を歪める必要があります。お分かりになりますか？」

「……殲滅対象を含めて全ての人間に服従してしまった場合、兵器としての機能を果さない、ってことですか？」

言葉を整理する時間を貰った孝介は、これまでの董の話の吟味し言葉を作った。果たして、それは正解だったようだ。

董が満足そうな笑顔を浮かべ、頷いたのだ。

「その通りです。攻撃を望む人間が『撃て』と言い、攻撃を望まぬ人間が『撃つな』と言った場合には、双方を立てようとしたロボットの認識に矛盾が生じますね。『人間に服従しなければならぬ』という条文には『人間に危害を加えてはならない』の条文に反する場合はこの限りではないと明示されていますが、前提条件として危害を加えられるようになったのなら、こちらも派生的に否定できません。後は全ての人間に服従してしまう可能性を消してしまえばいい」

「……『人間』っていう言葉の意味を限定する、ってどこか」

「ご名答、です」

轍の返答に一際大きく首肯すると、区切りはついたというふうに、董は鞆から新たな紙を取り出した。

「ここまでが、今のところ推察されている内容です。これらの事を前提として、お二人にやっていただきたいのはIACの内部調査と、事件現場でのロボット犯罪であるという裏付け調査です。今後、お二人には別行動をとって頂きます」

調査内容が記された紙面を見て、二人は緊張を隠せなかった。今やIACは世界に名だたる大企業。そこに切って入っていくことに、底知れぬ恐怖を感じたのだ。

IACには、孝介の両親が巻き込まれた事件を揉み消した過去がある。つまり、自分たちの落ち度で招いた事件であるにも関わらず、IACは断罪されていないということだ。

IACに不都合だから、という理由で当たり前のように道義的責任を免れてしまう企業を相手取ることとは、正直怖かった。

ここに來てようやく、引き受けた依頼の圧倒的な大きさを思い知った。

「ご心配なく」

董の鋭さを持った声が、そんな心配を切り裂いて二人の元に届く。「それぞれに国際平和機関から一人同行します。この国際機関の名前には、IACとも言えども簡単に手出しは出来ないはずです」

「へえ、それなら大丈夫か」

轍は納得しているが、孝介にはまだ気掛りが残っていた。轍に向かつてそれを言う。

「なあ、どっちがどっち——」

「俺が事件現場の調査に行こう」

「……………」

……コイツ安全な方を選びやがった！

「ちよつ——」

「分かりました。それでは邑井様には現場調査をお願いします」

反論しようとしたところで、董にまで決定印を捺されてしまう。

今さらだが、依頼を頼まれているのはずの探偵二人が、依頼主に会話のイニシアチブを取られているのはどうなのかと疑問に思った。

その依頼主が、孝介の方を向く。

「それでは副島様がIACの内部調査ということで。そちらには私が同行します」

「おうとおいおい、なら俺の方には誰が来てくれんの？」

「邑井様には日本支部内でも有名な方が同行する予定です。——山、ですからね。熊とか出たら大変ですから」

「……………嫌な予感がしてきた。なあ孝介、今なら代わってやっても——」

報いとはかりにほくそ笑んだ孝介は、轍に最後まで言わせなかった。

「長野って言ったら、あれだ。世俗の垢に汚れていないウブな女の子が沢山いそうじゃないか。よかつたな」

「ぐぬぬぬ……！ わーったわーったよ！ 田舎の純朴カワイ子ちゃん引っ掛けて向こうでよろしくやってやんよ！ 俺がどえりやあ可愛い子連れて帰ってきててもお前にゃ一言も喋らせねえからなっ！
！」

孝介に向って怒鳴るが、それを柳に風と受け流す。トドメに董がこう言った。

「仕事だと言うことをお忘れなく。あと、そちらに同行する人が、

「そんなナンパの時間を許すかどうか……」

「……！」

第三章

翌日から調査は開始された。

董の要求では『ロボットを連れてくるように』とのことで、確かにその方が世間的には目立たない。

しかし、孝介は家のロボットを外に連れ出すことに、不安と羞恥を感じていた。

というのも。

「……随分、やんちゃなロボットですね」

「……でしょう？」

基本的に安定しているはずのロボットが不規則に蛇行し、しかも時々、路傍の石に乗り上げてはバランスを崩す。

『Works965 OL』シリーズからしたら、考えられない状態だった。

今もなお目の前で繰り広げられている珍妙な光景を受けて、もう我慢できないといったように、董が言葉を漏らした。

そんな時でも婉曲に表現するのが、近藤董という人間だ。

「どこか不具合でも——」

「仕様です」

「でも——」

「仕様です」

「……そうですか」

孝介の一边倒な返事に、訊ねても無駄だと悟ったらしい。董は前に行くロボットへと目を戻した。

カジュアルな格好の孝介の隣に並ぶ普段着の彼女は、長い髪を結わずに下ろしており、昨日とは雰囲気違って見える。今日は眼鏡も掛けていなかったたので、尚更そう感じるのかもしれない。それでも、改めて見ても綺麗な人だった。

IAC本社の最寄り駅から延びる大通りには最近流行のアップレル

ショップやシックな雰囲気のカフェなどが並んでおり、休日ということもあって、孝介たちの他にも多くの人やロボットが行き来している。二人も、その中に溶け込もうとしていた。

しかし、衆目を集めてしまうものが一つある。

孝介の連れているロボットだ。それがどういった性質の注目かは、四方から向けられる奇異の視線が如実に示しており、曲解の余地は無い。

モダンな通りには、休日を謳歌するアベックも溢れている。そのことを考えれば、孝介とスミレの二人組みは目立つことなく風景に溶け込めるはずだった。が、生憎と奇怪な動きをするロボットのせいで逆に視線を集めてしまったのだ。

董が孝介との距離を少しだけ詰めたのは、周囲からの視線の圧力故だろうか。

ギャラリーを意識から外すようにしながら、孝介は董に尋ねる。

「……まだ着かないんですか？」

「もうすぐです。……あ、ほら。見えてきました」

董が目で示すのは前方。三十階はある巨大な建築物だった。

ここから直線距離で五百メートルはありそうなのに、押し掛つてくるような重圧を放っているその威容は、扇形を縦に伸ばしたような形状。南側に向いた曲面部分全てを太陽光発電パネルで覆っており、そこで一週間に創出される電力量は、一般家庭が一年で消費する電力量と同程度だという。

その成果として『環境に優しい企業』とまで称されるIAC。その裏の顔を、これから探りに行くのだ。

そう考えた途端、心臓の鼓動が早鐘を打ち始める。

飲み込んでも飲み込んでも口の中に溢れてくる唾液をそれでも飲み下しながら、孝介は固くなる足を動かした。

IAC本社の一階はミュージアムとして一般開放されており、無料で入退場することができる。会社の風通しの良さをアピールするためだろう。

入口に到着し、ロボットを先頭に自動ドアをくぐろうとした、その時。

左腕に絡んでくる熱を感じた。

「な!？」

その正体に気付いた瞬間、孝介の顔が熱くなる。

董が腕を組んできたのだ。

「そんなに驚かないでください。こうした方が自然でしょう?」

平然としているように振舞う董の頬も、心なしか朱に染まっているように見えた。

別の緊張に身体を硬くしながらミュージアムに入場する。

中を見渡してみると、確かに腕を組んでいる男女が多い。こんな場所がデートスポットとして成立していることに、孝介は驚いた。

ミュージアムでは、オルテガ「ラクスネスの略歴やロボット開発の歴史、さらにはロボット業界におけるIACの占めるシェアなどまで紹介されており、入場料をとってもいいような情報量だが、それでも男女が二人で見えていくには少々退屈な内容に思えた。

暗めの照明に、大理石の床。一步を踏み出すたびにカッソカッソという足音が反響し、静謐な空気に解けていった。

「そういえば」

いつの間にか、別の思考に落ちていた孝介を董の声が引き戻す。

「このロボットに名前は無いんですか?」

「名前?」

孝介は聞き返した。次いで目の前で動きを止めているロボットを見る。

……コイツの名前、か。

事務所にいるロボットには『ミラ』という名前がある。所長である源三郎が命名したのだ。どこかのキャバクラで熱を上げた女性の源氏名が元ネタらしい。

しかし孝介が連れているロボットには、まだ名前がなかった。「決めてなかったです」

「なら付けてあげましょうよ。自己の独立性を認識する学習機能がロボットには備わっていますし、名前はそれをより明確にするアイデンティティにもなります。この子がちょっとだけ御転婆なのも、それが原因かもしれません」

非科学的な話を、あまりに真面目に董が言うので孝介は苦笑した。「それは無いでしょう。コイツを買った相手からも誤作動が多いとは言われていました。元々の構造のミスですよ」

「そういう工学的な意味ではありません」

董は首を横に振る。あくまで表情は真面目なままで。

「ロボットは、声紋認証によりある程度の人物の特定が可能です。つまり、多く話しかけられている人の声はより明確な判別ができるようになり、多くの人の声が溢れる空間でもその人の声だけに焦点を合わせることができんです。お分かりになりますか？」

「……………」

孝介は無言で首を振る。

「……私が言いたいのですね、ロボットも人もそんなに違いは無いってことです。もちろん有機と無機の大きな違いはありますが、個人を特定するし、学習もする。ロボットの方が人を明確に認識してくれているのに、人がロボットを独立した一団体として見ないのはフェアじゃないですか。ロボットも不具合起こしたくなるってものですよ」

孝介は目を丸くした。今の台詞は、董の口から出そうにない内容だったからだ。

「随分と感覚的なことを言うんですね。昨日は、ロボットはあくまで機械だって言ってたのに」

「ええ、確かにそう言いました。でもあれは世界平和機関に勤める人間として、正確な状況把握に努めた結果としての言葉です。今とは違います」

「なら、今は誰としても言葉なんです？」

董はロボットを見たままで。

「……一人の女子としての、です」

頬が紅潮していくのが分かる。しかし、その変化はお互いに起こった。

まるで、今は一人の女子として来ている、とでも言いたげな言動だったからだ。

「き、起動マニユアルを読まなかったんですか！？ 私はそこに書いてあった事を言っているだけです！！」

怒鳴るように捲し立てる董の印象は、孝介の中で昨日とは一変していた。

表情に出ないような心の中だけで笑み、董の詰問に答える。

「残念ながらコイツは中古品で、マニユアルらしきものは一切付属していませんでした」

孝介はポケットから折りたたまれた紙を出す。露天商の老人から貰った、詩文の書かれた紙だ。それを董に差し出す。

「説明書だと渡されたものは、まあこの通りで」

何度も読み込んだお陰で、そらんじることでもできるようになった内容を思い浮かべた。それでも意味不明な詩文に、思い出すたび苦笑が漏れる。

「……なんです？ コレ」

やはり董にも意味は分からないようだった。

「さあ？」

「さあ、って……。あ、でもちゃんと情報チップはあるじゃないですか。ちゃんとダウンロードしました？」

「自分、その読み込ませ方が分かりませんで」

「……………」

冷たい視線が董から送られてきた。

「……とりあえず、これをダウンロードしましょうか」

「面目ない」

返事は無かった。

……寒い、寒いぞ！

しょうがないので、停まっているロボットを呼ぶ。こういう時、名前が無いのは確かに不便だった。

「おい、ちょっとコツチ来てくれ」

『かしこまりました』

孝介の声に反応し、ロボットがこちらへと向ってくる。その動きはどこか焦っているようにも見えた。

そのロボットが、孝介の目の前で停止する。

「それでは、このチップを赤外線センサーに掲げてください」

「え、それだけ？」

「ええ、それだけです。それだけなんです」

どこか陰のある言い方に、孝介は肩を縮ませる。

……俺、これまで探偵らしいこと何一つしてない。ここまで彼女に頼りつきりだし。

そんな無力感を感じてしまい、肩を落とした孝介は素直に従った。

『……………』

「……………」

数秒ほど経過しても、ロボットの方から何もリアクションがない。やがて董の額に光るものが浮かび始めた。

それが見えていないフリをしながら、孝介は呟く。

「反応ありませんね」

「……え、ええ。そうですね」

「どうしたんでしょうね」

「……………」

「調子悪いんですね」

「……………」何か、言いたげですね」

その時。

『エラーです。エラーです』

と、警告音と共に機械音声が響いた。今度こそ、董の表情が固まる。

「面白いですね」

「何がです!？」

孝介が素直な感想を述べると、董はさらに顔に紅葉を散らし、それでも場所を弁えたのか抑え目に怒鳴った。

「もう! だったら早くこの子の名前を決めなさい!」

「は、はいっ」

突然の命令口調で、孝介の背筋は反射的に伸びた。董の刺々しい視線に急かされながらロボットの名前を考えていく。

ふと思い浮かんだのは、このロボットを買った時の情景だった。全てを染め上げる夕焼け。その色が鮮烈に孝介の脳裏に再現された。

「——アカネ」

「……茜、ですか? 随分と人間味のある名前ですね。ロボットには少し不似合いな気がします」

「コイツを買った時、ちょうど夕暮れ時だったんで」

「そうなんですか。私はてっきり昔の恋人の名前かと」

「……そんなどっかのバカ義父みたいな真似するか。」

「ともかく、お前の名前はアカネだ。異論はないか?」

一応、ロボットにも訊ねる。

『「ご」ざいません。本日より本機体名はアカネとします。ありがとうございます。』

了承も得、これで晴れてロボットの名前は『アカネ』となった。

隣では董も満足そうに頷いているので、とりあえず嵐は去ったと考えてもいいだろう。

結局役に立たなかった説明書を仕舞い、二人と一体はミュージアム内を歩き始めた。

展示を一通り見てまわる間に、ここからのミッションの進め方を説明された。

このミュージアム内には情報検索用端末として複数台のコンピュー

ータが設置されており、そこからIACのマザーコンピュータである『New』にハッキングを仕掛ける、という段取りだった。

その際、ロボットの高速演算を利用するという。

「アカネでは少し不安ですけど……」

……だったら自分たちで用意すれば良かっただろう。

文句は口に出していなかったのに、顔には出ていたようだった。董がジト目で孝介を見ると、溜息混じりに釈明を始める。

「世界平和機関に配備されているロボットのデータベースには、多くの国際機密が保存されているため、今回のような逆にハッキングされる可能性のあるミッションには向かないんです。もちろん国家機密級のプロジェクトが掛けられています、そんなもの、日々技術革新の進む現代ではあまり信用できませんから」

端末の前に到着すると、タッチ式キーボードがモニターの前に浮かび上がった。

「アカネ、接続を」

董が言うも、反応しない様子だった。

「彼女の指示に従ってくれ」

「かしこまりました」

アカネがモニターの前に移動し、赤外線でコンピュータへとアクセスする。元々赤外線誘導のための機械が設置されているので、ここまででは一般客が行っても問題ないようだ。直接自分のロボットに公開情報をダウンロードするためだろう。

しかし、自分たちが欲しい情報は、そんなものではない。

董の高速タイピングで、あっという間に検索エンジンのウィンドウが開いた。

孝介の脚が震え始め、背中にも嫌な汗が伝っている。

「問題はここからです」

「……本当に、大丈夫なんですか？」

「破滅する時は一緒ですよ」

「……冗談ですよね？」

「私にも分かりません」

可愛らしく小首を傾げる董だが、その指先が細かく震えているのに気付いた。大きく震えだすのを懸命に抑えているような細かさの震えだった。

それを見ると、孝介の心臓はある程度落ち着き始める。

これほど危険な綱渡り、彼女だって怖くないはずがない。それなのに腹を括って、この危険なミッションを遂行しようとしている。

……男の自分が恐怖を煽るようなこと言っただろう。

今するべきは、首よりも腹を括ることだった。

だから今度はこちらから言った。

「破滅する時は一緒です」

「はい。不束者ですが、よろしく願います」

軽い冗談を言い合い、お互い微笑を浮かべ、そして。

「——では、始めます」

地獄の一丁目に踏み込んだ。

『コンプリート。正常に認証されました』

「……………」

二人は声も出なかった。目まぐるしく表示内容を変化させるモニターを、ただ半眼で見つめるだけだ。

「……私、何かしましたっけ？」

「いえ……恐らくは、何も」

緊張感を持ってハッキングを始めたのは良かった。二人で困難に立ち向かうことによって妙な連帯感も生まれたりもした。

しかし、その緊張感も連帯感も、持続したのは一分程度。

職員用入口にアクセスし、そこでパスワードの入力をしなければならなかったのだが、目を閉じながらの深呼吸で心を落ち着けている間に、こういう理屈が既にパスワードが入力されていた。

しかもそれが認証されてしまい、意味が分からず二人の思考は停

止する。

最初の関門を突破しても、次々に立ち塞がるファイアウォール。しかし、その都度勝手にパスワードが入力され、いとも容易く突破できてしまった。

モニター上では、明らかに情報の機密度が上がっていく。

その中で、一刻ごとに様変わりする画面のリズムに同調するものがあった。

「……まさか、コイツが？」

「そのようですね」

アカネの頭頂部にある明緑色のライトが高速で明滅していた。董はモニターに向けていた胡乱な瞳の矛先を、まずはアカネに、続いて孝介に変更した。

「一体この子は、どんなハードウェアを積んでいるんですか？」

「知りませんよ、そんなの！」

言い合っているうちに、画面は目的の内部情報データベースに到達していた。

「ともかく！ 早いうちに情報かつぱらって帰りましょうよ！ ア

カネの検証はその後でもいいでしょう！？」

「……………それもそうですね」

「何です、今の一拍の間？」

「機械弄るのって興奮すると思いませんか？」

「何が！？」

「今から楽しみです」

「だから何が！？」

噛み合っていないような遣り取りの中でも、董の指は止まっていなかった。片っ端から情報を全て携帯端末にコピーすると、辿った痕跡を消していく。

動作は、ものの数秒で完了した。

「ふう、終わりました」

「良かった。それじゃ——」

「お客様」

突然背後から声を掛けられ、二人はビクウ！！と肩を縮み上げさせる。

「……っ！」

一瞬にして痛いほど心臓が跳ね上がる。その鼓動に触発されたように、全身の震えがぶり返してきた。

引き攣る顔面をどうにか繕いながら恐る恐る振り返ってみると、そこには笑顔を浮かべた男性が立っていた。年の頃は二十代後半から三十代前半といったところか。スーツを着ていることからして、ここの従業員だろう。

威圧感のない体格に、邪気のない笑顔、人懐こい声。少しだけ孝介は気を抜いた。

「何かお困りでしょうか？」

「あ、い、いえ！ 大丈夫ですつ。もう済みました」

孝介は立ち上がり、董を促す。

「それでは、自分たちはこれで……」

咄嗟に董の手を引き、早足で男性の横を通り過ぎる。その際も、

男性は目を細めた笑みを浮かべていた。

そのまま数歩を歩き、出口は目の前。

窮地は脱したかと思っつこうとした、その時。

「何っ！」

抑え切れなかった驚きの声が聞こえてきた。それは、確かに人懐こいと感じたはずの男性のものと同質の声。

次いで起こったのは、何か硬質の小物が大理石の床に落ちる音。

それは丁度、歩を止めた孝介の足元に転がってきた。掌よりも少し大きく、バチバチという薪が爆ぜるような音を伴って、先端から出る二つの端子の間に青い光を走らせるもの。

スタンガンだった。

「……っ！」

孝介はそれを見て目を見開く。

男性が悔しそうに、孝介の足元にあるスタンガンを見ている。それから、いつの間にか強化炭素コードを伸ばしていたアカネを睨んだ。

状況から考えて、背後から孝介を襲おうとした男性のスタンガンを、アカネが弾き落としたのだろう。

そこまで思い至り、現状ですべきことを一瞬のうちに判断した。

「アカネ！ お前も早く来い！」

『かしこまりました』

返事を聞くや否や、董の手を握ったまま孝介は走り出した。出入口は目前だったので、さしたる時間も掛からない。

……どうにか逃げ果せるか……！

一縷の希望に縋って、目を焼くような太陽の下に躍り出た、瞬間。……くっ」

希望は断ち切られた。

「両手を頭の後ろで組め」

出入口は、武装した男たちに包囲されていた。リーダーらしき男が拳銃を構えながら、顎で指示してくる。官制が敷かれたのか、一般人の姿は通りにも見えなかった。

それでも悪足掻きに後戻りしようとするのだが、そちらからも人の駆ける足音が響いてきた。大理石の床が、少しだけ恨めしかった。せめてもの見栄として、董を背後に隠すようにしながらリーダーと睨み合う。そして指示に従おうとしたところで。

「つておい。ちょ——」

董が孝介よりも一步を前に出た。

「私は世界平和機関の捜査官です」

身分証を掲げると、俄かに男たちの間からどよめきが起こる。同時に息を呑む気配も伝わってきた。国際機関の職員に銃口を向けていることに気付いたらしい。

「この度はIACに掛けられた、とある嫌疑を調査するためにやってきました」

言つと、男たちはハッキリと動揺し始めた。自分たちの勤めている会社が、国際機関から睨まれるようなことをしているのかと疑いだしたようだ。

動揺があれば隙も生まれる。闇に消えかけた道が、再び灯火の下に出てきた。孝介の中にも淡い期待が芽生えた。

ところが、その芽は簡単に踏みにじられることになる。

「あら酷い」

孝介たちの背後。ミュージアムの中から聞こえてきた妙に艶かしい声によつて。

「まるで、あたしたちが重罪人みたいな言い方ね。失礼しちゃうわ」二人は振り返り、声の持ち主を見て、絶句した。いくらロボットに疎い孝介でも、顔を見たことがあった。今日日、ニュースでロボット関連の話題が報じられない日はない。そこに必ずと言っていいほど、顔を出している人物。

「な、なあ。コイツって……」

「ええ。IACの最高経営責任者、ガートルード・バーナムです……」

以前からIACは、本社こそ日本に置いているものの、経営の拠点は日本からアメリカに移していた。その関係で、現在では重役のポストに就く人間も国籍は様々である。

その中でもガートルード・バーナムはIAC初の女性役員であり、近年再び減少傾向にある女性雇用にとって希望の星とも言われる人物だった。

特徴的な薄緑色の瞳は切れ長で理知的。長身の身体に纏うのは赤のエナメルスーツと、そして同色のハイヒール。春の風によって舞う黄金の長髪が派手に彩る顔には笑い皺が浮かび始めており、三代後半に見える。しかしこちらは、董とは逆にもっと上だと言われなくても納得できそうだった。年齢を重ねて見えるのは、おそらく笑い皺の質の問題だろう。

こうして生で見るのと、ニュース映像で見るのとでは、抱く感想

が百八十度違った。

「なぜ貴方が日本に？　今はアメリカで取締役会真っ最中のはず……」

返ってきたのは流暢な日本語。

「あら。あたし、日本って好きよ。だって馬鹿ばかりなんだもの。こんなに優越感に浸れる国も無いわ」

テレビの中のガートルードは、決してこのようなことを言わない人を使ったような笑みを浮かべたりもしない。二次元に映し出されるのは、あくまでも女性たちの憧れであるカリスマだった。

ただ、他人が畏怖して寄り付かなくなることをもカリスマと呼ぶのなら、実際に見るガートルードもカリスマには違いない。

「質問に答えてください！」

「いま答えたじゃないの。お・バ・カ・さん。でも……そうね。別の答えとして、愚かなユダを裁きに來た、とでも言っておこうかしら」

董の怒声を涼しい顔で往なすガートルード。

「それよりも。そこのおバカさんは、世界平和機関って言ってたかしら？」

視線で董を射竦めた。

「え、ええ」

男である孝介でさえ、ガートルードの威圧感に気圧されている。気丈に言い返す董も、決して平気ではないだろう。

「残念ねえ。あなたの行動は全て徒労に終わることになるわ」

「……殺す、と？」

「半分正解。でも、もう半分は不正解よ。この世界はね、おバカさんには知り得ないところで大きく動いているの」

「ど、どういう事です！？」

「貴女たちが泥棒した、その情報を見れば分かることよ。見る機会があれば、だけれど」

ふふふふふ！　という、聞きたくもないのに脳に浸透してしま

うガートルードの笑声が辺りを包む。重なるように、陣形を立て直した男たちが銃を掲げた。

ガートルードの槍のような視線は、次に孝介を捉えた。

「そっちのおバカさんは、面白いおもちゃを持つてるのね」

生まれてこの方、感じたことのないような寒気に襲われ、肌が粟立った。

「それ」

ガートルードが気だるげに腕を持ち上げる。

「どこで手に入れたのかしら？」

指差したのは、孝介のすぐ目の前に停まっているロボット——アカネだった。

孝介の唇は動かない。正直に答えていいものかどうか判断できず、また判断できたとしても、尋常じゃないほどの唇の震えで言葉を紡ぐことはできなかった。

「ふん、まあいいわ。映像記録を見れば分かることね」

それを見て、ガートルードは面倒くさそうに鼻を鳴らす。

「あたし飽きてきちゃった」

黄金の髪を広げながら、ガートルードは背を向ける。

「あたしがエレベーターに乗ったら、殺しちゃっていいわ。ただし

――」

顔だけをこちら側に向けて、先ほどのリーダーらしき男にウィンクを送った。送られた男の方かというと頬を染めるでもなく、無表情を保つでもなく、顔を強張らせていた。

「あたしのおもちゃを傷つけたら、承知しないわよ？ あと、お片付けもよろしくね」

リーダーだけでなく全ての男たちを震え上がらせながら、ガートルードはヒールを大理石に打ち付けるようにしながら歩き去った。

後に残された、孝介、董、アカネ。そして銃器を携えた男が多数。ガートルードの一步一步が命を削るタイマーとなり、その歩みが

エレベーターに吸い込まれ、止まったとき。孝介たちの命脈が尽きる。

愉快に跳ねるような、踊るようなステップは止まることを知らない。孝介たちは、刑の執行を待つ死刑囚のように、唇を噛んで待つことしかできなかった。

……くそ、どうにかできないか。

董が浮かべているのは無表情で、その奥にある感情は汲み取れない。どこぞの神仏に祈っているのか、それとも諦観したが故に平静なのか。

ガートルードがエレベーターに乗り込むまで、あと数歩。時間にして十数秒ほどだろうか。ご丁寧にも、ロボットがエレベーターを開けて待っていた。

……こんな僅かな時間に、何ができる？

心に暗雲が立ち込め、絶望と並ぶ諦観が未来への視界を覆い始める。

しかし、ふと。ガートルードの最後の言葉が、脳裏に甦った。

その言葉で身を震わせたのは、孝介たちではなく、むしろ孝介たちを取り囲む男たちの方だった。それはなぜか。

……思い出せ。

『あたしのおもちやを傷つけたら、承知しないわよ？ あと、お片付けもよろしくね』

後半は関係ない。憂鬱になることこそあれど、この言葉で恐怖は感じないはずだ。
だとしたら。

気付いて間もなく、孝介は行動に移した。

気休めかもしれない。死ぬまでの時間がほんの数秒、伸びるだけかもしれない。

……でも――。

アカネの傍に駆け寄りつつ董の手を取り、自分の胸の中に来るように導く。驚愕に目を見開いている董には、向こうで謝ろうと決め

た。

承諾なしで抱きしめてしまったことを。

腕に力を込める。すると、シャツの胸元をギュツと握るような感触が帰ってきた。

生まれて初めて感じる感触に、自然と笑みがこぼれる。

……最期には、悪くないかもな。

『孝介様』

「アカネ。どうにか董さんだけでも、守りきれないか？」

『不可能です。我々の概念プログラムでは「片方の人だけを助ける」ということはできません』

ロボットの基礎プログラムだ。この緊急事態ですっかり失念していた。

ここに来て、更なる追い討ち。孝介はもう諦観の笑みしか出なかった。

「これは、本当にただの気休めになりそうだな」

それでも、男たちはガートルードへの恐怖から、アカネに傷を付けることが出来ない。アカネの側に寄っていれば、彼らも引金を引くのを躊躇するかもしれない。些細な可能性の話だが、縋れるものはこれしかなかった。

これでもう、できることはなさそうだった。

孝介は、目を閉じた。

『孝介様』

しかし、呼ぶ声がする。

『ダウンロードをお願いします』

アカネだ。

『ダウンロードをお願いします』

こんな時に一体なんだ、とは思いつつ、何度も言ってくるので、孝介は懷から説明書を取り出す。

「でも、これさっき読み込めなかったんだけど？」

『今ならば可能です』

一切の間がなかった。よほどの確信があるらしい。

「これが、一発逆転の鍵になったりしないかね」

そんなことがある訳ないのに自嘲ぎみに言いつつ、しかし何かが起こりそうな予感もした。情報チップをアカネの赤外線センサーに近づける。

時間的には、そろそろタイムリミットだ。ガートルードがエレベーターに乗り込むかどうかといったところだろう。これが本当に最後の行動になる。

思えば、昔の自分なら考えられないことだった。

最後の最後にロボットに頼るなんてことは。

この数日の間。轍に諭され、アカネを買い、董と出会い、ロボットへの認識が変わっていった。

両親の事件は、孝介の中で未だに終わっていない。負の感情が一扫された訳でもない。

それでも、世界は動いている。

自ら停滞を望む者は、容赦なく過去に取り残す。それが、日に日に進歩していくこの世界の在り方だった。

食わず嫌いだった部分がある。意地を張っていた部分もある。もしかしたら孝介自身、誰かに背中を押してもらえるのを長い時間、待っていたのかもしれない。

……卑怯な男だ。

ピー、という電子音が鳴る。

『ダウンロードを開始します』

エラーにはならず、正常にダウンロードが開始された。

それと同時に、男たちが緊張の面持ちで銃を構えなおす音が聞こえる。どうやら、タイムリミットはもう間もなくらしい。

……これは、間に合わないかもな。

もう一度、董を抱きしめる。するとまた、向こうからも力が返ってきた。

素直に、失いたくないと思った。

『ダウンロード完了』

その思いに応じるように、アカネが電子音を響かせる。

『個体名・アカネ。モルトⅡプログラムを遂行します』

その瞬間だった。

「な、何だ!?」

引金に指をかけていたリーダー格の男が、突然の事態に声を荒げた。

アカネから、スモークが噴出したのだ。

白色の煙が瞬く間に辺りを包み、すぐに手の届く範囲すら見えなくなる。

男たちと同じように視界が塞がれ混乱した孝介は、董を抱く手に力を込めた。すると、その手が何者かに掴まれる。

「コッチです!」

聞いたことのない女性の声。声の高さからして、二十歳にも達していないさそうな少女のものだった。声の主は呆然とする孝介たちを一気に引つ張り上げると、手を握ったまま先導していく。

元いた場所から数歩分離れた時、一発の銃声が響いた。錯乱した男の一人が発砲したらしい。まさしくそれが引金となって、皆が銃を乱射する阿鼻叫喚の騒ぎが起こった。

「止める、撃つな! ロボットに傷が付いたらどうする!」

一人冷静だったリーダーが叫んでも、重なる銃声に掻き消される。孝介たちはその混乱に乗じ、死が散乱する空間から、少女の導きによって命からがら逃げ出すことに成功したのだった。

スモークの中から抜け出してすぐ路地裏に逃げ込み、入り組んだ道を所々曲がりながらさらに十分ほど走り続けて、ようやく少女は足を止めた。

「ふう。お二方とも、お怪我はありませんか?」

少女が笑顔で聞いてくる。まるで、旧知の間柄に向けるような笑

顔で。

孝介よりも頭一つ分身長の低い少女は、見慣れない服装をしていた。全身を覆うのは青いラインの入った白いタイツのようなもので、その上から腰や胸元に白い薄い装甲を装着している。

しかし、さらに特徴的だったのが髪の色。

地面まで届きそうな艶のある長髪は――鮮やかな茜色をしていたのだ。

と、そこで孝介は気付いた。孝介の両手は塞がっていて、片方は董の手を、もう片方は少女の手を握っている。

「あ、アカネ！」

「はい」

「アカネがいな……、……は？」

少女が、孝介の言葉に反応した。それから穏やかな笑顔を浮かべる。

「アカネはここにいますよ」

「は？」

孝介の目の前にいるのは、人間の少女。どこをどう見間違ったとしても、ドラム缶型の金属ではない。清潔感のある白い肌。生命力を感じさせる瑞々しい瞳。澄んで透き通るような声。淀みなく滑らかな拳動。それから、手を握った時の感触。どれをとっても人のそれにしか感じられなかった。

訳が分からず目を白黒させていると、自分がアカネだと名乗った少女は、孝介に何かを差し出した。

それは、折りたたまれた紙片。情報チップ付きの説明書だった。どこかで取り落としてしまったのを、少女が拾っておいてくれたようだ。

「このチップに入力されていたのは『モルトⅡプログラム』というものを発動させるキーコードだったんです」

孝介はアカネが最後に言った言葉を思い出した。

「『モルトⅡプログラム』……。そうだ、それアイツも言ってた。

何なんだ、それ？」

「モルト……。和訳すると『脱皮』、ですか」

董も混乱しているようだが、必死に状況を把握しようと頭を捻っている様子だった。

「そうです。『モルト』プログラム』により、私は文字通り『脱皮』しました。今頃、中身のなくなったロボットの抜け殻だけが、あそこに残ってますよ」

少女は得意げに人差し指を立てる。その姿は、ますます人間にしか見えなかった。

「じゃ、じゃあ、どうして最初に情報チップを掲げた時は、このプログラムが発動しなかったんだ？」

ドラム缶型のアカネにしか答えられないはずの疑問を、少女に投げかける。

すると少女は少し怒ったように、可愛らしく頬を膨らませて見せた。

「それは、孝介様が私にいつまでも名前を付けて下さらなかったからですよ。『モルト』プログラム』は、私の固有性が明確にならないと発動しないんです。個体を明確に識別するものである『名前』と、……。あと、私をちゃんと識別してくれる『人』。あのプログラムには、この二つが必要だったんです」

「あ、そうか。あの時はまだ名前を付けてなかったから……」

少女に証拠を突き付けられ、そろそろ信じざるを得なくなってきた。

「じゃあ君は本当に、あのアカネだったの？」

「初めからそう言ってるじゃないですか。ロボットの言うことも信じてくださいよ」

まるで人工物のように整った顔で笑顔を作る少女——アカネ。未だに信じきれないがやはり、この少女は人型のロボットとなったアカネなのだろう。

それにしても、人型のロボットなど聞いた事がなかった。

見分けなど付くはずがない。ロボットだということを明かされた今でも、下手をしたら人間なのではないかと疑ってしまいそうなのだから。

「お前は——」

「待っていました」

いきなり強く言うのと、アカネは孝介と真っ直ぐに目を合わせた。髪の色、そして名前と同じように茜色の瞳だった。

「私を目覚めさせることのできる唯一の人を。ずっと」

そして、次のアカネの言葉で孝介の表情は完全に固まった。

「副島英介博士と副島棗博士のご子息である副島孝介様を、待っていたんです」

「なっ……!!」

衝撃が、来た。

どうして両親の名前を知っている。これまで誰にも——轍や、義父である源三郎にすら明かしてこなかったはずなのに。

アカネは、露天商の老人から買った。自分に似合いの物がある、と。

あの老人は一体誰だったのか。自分の両親の名前と素性を知るロボットを、ピンポイントで孝介に売りつけた、あの仙人の如き老人は。

考えても分かることではない、が——。

その時にも感じた、何かのシナリオに沿って自分が踊らされているような感覚。

得体の知れぬ大きなうねりに巻き込まれているようで、全身が震え上がった。

「ど、どうして——」

「ちよつと、よろしいですか？」

震える手をアカネに伸ばそうとした時、董が口を挟んできた。咳払い付きで。

「とりあえず、今はこの場を離れませんか？ まだ現場も近いですし、

どこか安心できる場所へ移動しましょう」

「あ、ああ……。そう、ですね」

孝介は挙げかけた手を下ろそうとして——その手をアカネに掴まれた。

「参りましょう、孝介様」

人と変わらぬ手の感触。そして見たことのないほど綺麗な笑顔を見せられ、孝介は心和むと同時に、何かに化かされているような心地だった。

向ったのは、桜井探偵事務所だった。

董は世界平和機関日本支部に戻ろうとしたのだが、支部の人間から連絡が入り、そちらにはマスコミが殺到しているとの事だった。孝介たちに逃げられたと判明したすぐ後、IACが世界平和機関に抗議文書を送付したらしい。それを耳聴く聞きつけたマスコミの力メラが、ターゲットとなる人物の到着を今か今かと待ち構えているのだそうだ。

世界有数の大企業であるIACが何らかの事件を起こしたとなれば、それはマスコミが黙っていない。しかし逆に世界平和機関が虚偽の嫌疑を掛けていたとしたら、こちらも格好の的になる。

マスコミにとっては、どちらにしたって甘い蜜なのだ。

「……大丈夫ですか？」

「え、ええ。……何とか」

名乗らなかつたのがせめてもの救いだ、IACが相手では董の名前の調べがつくのも時間の問題だろう。そうなれば、董の行動は著しく制限されてしまう。

なにより、この先どうなるかという恐怖が尋常ではないだろう。

「いざとなったら、ここで寝泊りしてください。一応シャワールームとか仮眠用のベッドもありますから」

「あ……ありがとうございます」

「それでも心配なようでしたら、まあ自分も付き合いますし……つて、そっちの方が心配か。あ、あははは……」

気の利かない冗談に乾いた笑い声を上げる。それでも董は「くすっ」と笑ってくれた。

そこに、コーヒーを淹れた二つのカップを盆に載せて、アカネが歩いてきた。今は孝介のロッカーにストックしてあったスーツに着替え、床まで届きそうだった茜色の髪を結んでポニーテールのようにしている。

「どうぞ」

「ど、どうも」

董は緊張した様子でそれを受け取る。きつと、まだ認識が混淆しているのだろう。

コーヒーを淹れる際、アカネは確かにロボット用の機械を操作していた。どうも目から指令の赤外線を照射しているようだった。

それからアカネは、当然の如く孝介の隣に腰掛けた。そちらに目を向ければ未だ見慣れぬ茜色の髪の少女。しかしその少女は、紛うことなく孝介の買ったロボットであるアカネなのだ。

「それで孝介様。これからどうなさるのですか？」

「そうだな……」

このままじつとしていても埒が明かない。それに、対面で沈みきった表情をしている董を解放するには、自分たちのやったことが間違いでないと証明することが必要不可欠だ。

ならば、今後の方針も変わらない。

「調査を進めよう。それしかない。……董さん？」

「はい、私は大丈夫です。やりましょう」

言って、鞆から携帯端末を取り出す。

「どこかのおバカさんも、この中には馬鹿の知り得ない世界の動きが入っていると行ってましたし」

董は、気を取り直すようにガートルードを皮肉る。

「今頃、ハンカチでも噛み締めて悔しがってるんでしょうね。いい

気味です」

嫌味すら敬語で言ことに孝介は引っかかりを感じた。

ふと、これまで訊いてこなかった、とある質問を投げかけてみる。

「董さんって」

「はい？」

「年、幾つ？」

「……………」

董は閉口した。

……………しまったあ！ これは地雷踏んだか！！

間を置いて返ってきたのは、こんな質問だった。

「……………幾つに見えます？」

……………お、女ってコワ！

どんな回答を望んでいるのか見当が付かない。普通に考えたら下に見られる方がいいと思うのだが、董のような真面目な人間は嘘を見抜く気がする。

正直に答えるしかなさそうだった。

「に、二十……………五？」

恐る恐る董の方を見ると、向こうもこちらに胡乱な目を向けていた。

……………違ったか！

しかし、やがて。

「……………ぷっ」

急に董が相好を崩し、嘔き出した。

「や、やつぱ違いました！？」

「ふふ、まあ」

とは言っても、董の表情に不穏な色はない。

「ただ、正直な人だなあって思っただけです」

「そ、それはどうも……………」

「正解を言いますと、私まだ二十二歳です」

「あ、あら……………」

……三つも上に言っただけ、俺。

ただ、実年齢は孝介と一つしか変わらないことが分かった。

「董さん」

「はい？」

「俺、二十一なんですけど」

「ええ」

「敬語やめませんか？ お互い」

董は嫌味を言う時すら敬語を使う。きっとこれは癖のようなものなだろうと思うのだが、それではいつも気が抜けないだろうし、使われている方としても仲良くなれている気がしない。

提案が受け入れられるかどうか内心ドキドキしながら董を見ようとして、

「それもそうね」

……やめるの早っ！

董は、これまでのイメージに無いような悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「抱きしめ合った間柄なのに、敬語使うのも変よね」

上目遣いで孝介を見る。

望んだ結果のはずなのに、どうしてか孝介の背筋には冷たい汗が伝っていた。

「孝介様」

「は、はいっ！」

そんな時。横合いから別の女性の声で名を呼ばれ、咄嗟に背筋を伸ばす孝介。見れば、満面の笑みを浮かべたアカネがこちらを見ていた。

その笑顔に翳が差して見えたのは、気のせいだろうか。

「始めましょう」

「あ、ああ。そうだな」

半ば急かされるようにパソコンの前へと移動する孝介。そこに苦笑しながらの董がついてくる。

背筋を伝う冷や汗は不快だが、董の苦笑が戻った対価だと思えば安いものと思えた。

携帯端末の赤外線送受信をオンにし、ハードディスクと繋げる。そこからの主導権は、孝介よりパソコンに強い董に譲った。

携帯端末に保存されているのは、IACの内部情報。

手際よくファイルを開いていくと、昨期の監査報告や経常利益、他社との契約書類など様々な文書が現れる。しかし、この辺りは自分たちの望むものではない。

続けてファイルを開いていく。

そして、見つけた。

ファイル名は、『今期以降の経営方針』。他のものとはデータの大きさが違った。軽く数十倍は下らない。このファイルだけで、携帯端末の容量の三分の一近くを占めていた。

「……怪しいな」

「ええ、そうね」

経営方針なら、今後のIACを左右する数多の情報が記載されていることだろう。例えば今後の商品販売戦略や——ロボット開発計画なども。

董が早速クリックする。

しかし、モニターに現れたのは別のウィンドウだった。

「……パスワード入力？」

「やっぱりこれだけフィルタリングが厳重ね。たぶんビンゴよ」

ただ、一つ問題があった。

「……パスワード……って、……何？」

「……さあ」

二人にはパスワードなど分からなかった。加えてウィンドウには、入力はいく回までと表示されている。それ以上間違えれば、ファイルが自動的に消滅する、と。これでは『下手な鉄砲も数打てば当たる』の考えも使えない。

目標物が目の前にあるのに、手の届かないもどかしさに二人が頭

を抱えていると、別の声が沈鬱な空気を破った。

「……『new - world』です」

アカネだった。

「『new - world』……新世界か？」

「はい。IACは公的な企業理念として『人類の生活に貢献する技術開発』などと謳っていますが、今代にも受け継がれている上層部の根源的な思想は『新世界の担い手となる』ことです。IACのマザーコンピュータである『New』も、この『new - world』を短縮して名付けられました」

記憶を辿るように、アカネは目を閉じている。

「その新世界を実現するための計画進路とも言える経営方針のファイルのパスワードは、起業した当初より『new - world』から変更ありません」

「……なんでお前が、そんなことを知ってる？」

このデータを奪取する際も、アカネは数々のパスワードを解除していた。当然の疑問だった。

それに――。

「お前は、俺の両親のことも知っていたな。どういうことなんだ？」

「そういえば、お答えしてませんでしたね」

孝介の正面で居住まいを正すと、アカネは熟年のメイドのように丁寧に両手を重ねた。

「お話します。私の記録している全てを」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0106k/>

マテリアル・ハーツ

2010年10月28日03時12分発行